井川秀樹組合員と入江久生組合員の「脱退」表明に対する声明

１１月２９日に大阪第一運輸所分会の井川秀樹組合員が、１２月７日には大阪第二運輸所分会の入江久生組合員が、それぞれＪＲ東海ユニオンの役員に付き添われて分会役員に脱退届を持ってきた。何ら話しもせずに、それこそ一方的で身勝手な振る舞いは許されるものではない。したがって、私たちは井川組合員と入江組合員による「脱退届」の受け取りを拒否したし、「脱退」なるものを断じて認めない。

この事態に対して早々と職場では、ＪＲ東海ユニオンが情報等で「組合員を無視した組織運営に決別」などと宣伝している。井川組合員に至っては、「決意表明」なるものをＪＲ東海ユニオンが職場の掲示板に貼りだしている。その内容たるや「休日出勤反対闘争で指名ストに参加させられた、主任レポート反対や裁判闘争・スト権確立による対立闘争ばかり、このまま居ても未来はない、今後は一日も早くユニオン組合員として認められるよう精一杯頑張ります」というものである。この「決意表明」なるものは、まるで会社への忠誠ではないか。かつて、自らもＪＲ東海労を脱退した者に「自分のことしか考えないのか」などと怒りをあらわにしていたことを忘れたわけではあるまい。

慢性的な要員不足の中、自分の休日を切り売りさせられることや、主任レポートに書く内容をどんどんエスカレートさせられて、物言えぬ職場づくりが進められていることについてどう考えるのか。会社のいいなりになって物事を考えないことこそが、私たち労働者にとって未来はないのである。

私たちは、加藤誠二さんの不当解雇を許さず１１月４日～５日のストライキを打ち抜いた。そのストライキと合わせて、職場から主任レポート反対の闘いと非協力闘争を“仲間の首を切られて黙ってられるか”という会社への怒りをもってみんなで闘ったのだ。このことは労働組合として労働者として当たり前のことである。

労働組合の一員としてみんなが闘った中で「東海労は居心地がいい」「でも僕は闘えない」とか「会社には勤務手配などで世話になっている」「俺には出来ない」と言って仲間の気持ちを裏切ったのが井川組合員と入江組合員であり、絶対に許すわけにはいかない。

今、職場では井川組合員と入江組合員に話をしようとしても常に会社・管理者が異常なまでにカバーしている。私たちは、会社とＪＲ東海ユニオンが一体となった組織破壊攻撃を断固跳ね返し、職場の諸問題を課題に労働者らしく闘う。

２００７年１２月　９日

ＪＲ東海労働組合新幹線関西地方本部